

曾於文藝

俳句

千草俳句会

水青き谿の深さや時鳥

田之上 千代子

見上ぐれば五月の空の光りをり

川辺 良彩

ほととぎす遠くに聞ひて橋の上

児玉 タエ子

大隅俳句会

葉桜や軽音楽の聞こえる

岩重 みどり

桐の花あわあわとして道祖神

河南 ミホ

たつぷりと水を貯へ初夏の山

穎娃 晴美



あじさい

短歌

末吉短歌会

競ひるしグランドゴルフの終り
たる午後の静けさ桜も笑ふ

草野 ミツ子

去勢と言ふわが都会のあり仔猫ら
の痛みに耐ふる春愁ふかし

長倉 佳津子

娘の年忌近づく空にやまぼうし
の十字架かざし白く輝よふ

大森 澄子

大隅短歌会

のぼり坂ふり向き見上げし「ケ
ン」の目をしのびて一人の散歩
はじめる

竹内 娃子

良縁にめぐりあえたる女の孫の
祝いの席に招かれており

安藤 フチ子

もう少し長生きしたくなりました

桜咲く日の孫の入園

川辺 敦子

「題字」

末吉文化協会会員
瀬戸口 淳 氏

財部短歌会

見渡せば山も黄砂に包まれてほ
んわか日射しを車行交ふ

祝迫 道雄

言ひ伝へ鬼門の方位外便所拂へ
ば身がくる健やかとなる

橋口 貞男

清明と言えど小暗き雲間かな飛
燕一閃横切りたり矢の如く

山城 忠

金色とも言ひたき程の柿若葉他
に先がけて屋敷を照らす

瀬戸口 芳子

しずかなる雨に濡れいるクレマ
チスいろとりどりの大輪咲かせ

川俣 若

懇ろに弔ふ亡夫の十三回忌たま
には夢で声の欲しきを

井上 澄子

ひたすらに真つ赤に燃ゆる薔薇
の花十二単衣を着るがごとくに

児玉 次雄

陽光と戯れるがにきらめきて
背伸びしている木木の若葉は

杉村 リカ

薩摩狂句

にがごい会末吉支部

俄雨奴 トタン葺どま
チンドン屋 南川 句

傘あのに くずれ俄雨で
濡れ鼠 浜田 一好

干た物が 俄雨ち濡れてん
婆あ昼寝 田代 勝泉

干た蒲団 俄雨で濡れっ
爺い当たっ 古川 一幹

大隅薩摩狂句会

加勢貫ろも 難すなつた
過疎ん村 西山 美代子

成就祝が 目当か友達の
余計な加勢 山田 竜生

加勢仕事つ 精出けしてっ
雇われっ 福元 多喜子

家族全部 終ん前来てっ
食かた加勢 津留 群志